

『ジークル博士とハイド氏』解釈 (二)

竹 森 修

さて、アタスンとエンフィールドがこうして散歩していると、向い側の通りに路次の入口があるところに差しかかりますが、「丁度そこに、一棟の不気味な建物が通りに面してその破風を突き出して」いました。

それは二階建てだったが、表には全然窓が見当らず、一階には戸口、二階には盲目の額みたいなの、窓の無い色褪せた壁があるだけで、どの造作にも長い間手入れを怠っていたことを物語る汚れたしをとどめていた。

エンフィールドはステッキでアタスンにその戸口を指し示しながら、それにまつわる「奇妙な話」を語り出すのでした。或る冬のこと、真暗な朝の三時頃、彼が「世界の果ての或る処から」家に帰ってくる途中のことでした。街灯のほかは何も無く、人びとがみな寝静まっていました。「どの街もどの街も、なにか行列でも待っているように、煌々と明りがついていて、そのくせ教会のようにがらんとしていて、しまいに彼は、こんなときよくあるように、じいっと耳をすまして、警官の姿をしきりに求めはじめるのでした。と、その時、突然彼の眼に二つの人影が映りました。一人は小男で、速い足取りで東の方へ足音荒く歩いていましたが、もう一人は八つか十くらいの子で、それと交又する横丁を一生懸命駆けて来ました。当然の事ながら、二人は街角で出会いがし

らに衝突しましたが、身の毛がよだつようなことが起ったのはその後でした。つまり、男は少女の体を平然と踏みづけにし、少女が地面に倒れて泣き叫ぶのをそのままに立ち去ってしまったのです。「話で聞くと何ともないみたいですが、眼で見ると地獄絵でした。それはとても人間の行為ではなく、まるで恐しいクリシュナ神像を見る思いでした。」エンフィールドは「待て」と叫んで駈け出して、その男の襟首をつかまえて現場に連れ戻しました。泣き叫ぶ子供のまわりにはすでにかなりの人だかりがしていました。男は全く平然として、抵抗もせず、エンフィールドをじろつと見たときのその眼差しは醜惡極まるもので、エンフィールドの体に、まるで走ったときみたいに汗が出たほどでした。その人だかりは女の子の家の人たちで、間もなく外科医がやって来ました。実は、その女の子はこの医者^{バグレイ}の往診を頼みにお使いに行つた帰りだったのです。その医者の診断では、女の子は大きな怪我もなく済んだのですが、ここでエンフィールド氏はアタスン氏に次のように申します。

「あなたはそこで話は終りだと思つたことだろうが、しかし、ひとつ奇妙な事があつたのです。私は一目見ただけで件の男に憎惡を感じました。その子供の家の人たちも至極当然のことながら、私と同じでした。しかし、私の注意を惹いたのはその医者の場合でした。彼はどこにでもいる極く平凡なお医者で、格別年寄りでもなければ目立つたところもなく、強いエジンバラ訛りがあつて、風笛^{パイプ}みたいに鈍重な感じの男でした。ところがその医者が私たちと同じ有様で、私の捕えた男を見る度毎に、医者は彼に対する殺意で胸をむかつかせ顔面蒼白になつてゆくのがそれと分りました。私には彼が何を考えているか分りました。丁度、私が何を考えているか彼に分つたようにね。殺すということは問題外でしたので、私たちは次善の策をとりました。私たちはその男に言つてやりました。此度の一件をスキャンダルにしてロンドン中にお前の惡名を知れ渡らせてやる事ができるし、また、してみせるとね。また、お前に友だちや世間的信用というものがあるなら、それを失わせてやるとも言つてやりました。こうして私たちが真赤になつて責めたてゐる一方で、その間ずっと私たちは女たちが彼に近付くのを懸命に防いでおりました。というのは、女たちは怪鳥ハーピー^{ハーピー}みたいに猛り狂つていたからです。

私はあんな憎悪に満ちた顔の輪を見たことはありません。」

「私も紳士だからいがみ合いをしたくない」と言い、また、表面は「悪魔サタンのように」平然としてせせら笑っていた男も内心はびくびくもので、「危害を加えかねない気配を大勢のわれわれのなかに感じて」、結局、子供の家の人たちに百ポンドの慰藉料を払うことで手を打ったのです。ところでこの男がそれに充てるための金貨十ポンドと銀行小切手を取りにみんなを後に従えて行った先が、はじめにエンフィールドがアタスンにステッキで指し示したあの路次の入口の「不気味な建物」だったのです。言うまでもなく、男はハイド氏であり、この「不気味な建物」はハイド氏の棲家だったわけですから。「表には全然窓が見えたらしく、一階には戸口、二階には盲目盲目の額額みたいな、窓の無い色褪せた壁があるだけで、どの造作造作にも長い間手入れを怠っていたことを物語る汚れたしるしをとどめていた」（傍点引用者）というこの建物の描写を見ると、なにかしら、「不気味な」「盲目の」「どの造作にも長い間手入れを怠っていたことを物語る」巨怪な人間の顔を見る思いがします。実際、エンフィールドとアタスンがこの建物に「不気味さ」「不吉さ」を感じて、おのれの自己満足を脅かされるとき、そこにそれとして表れているおのれの「受動的虚無」の深淵の水鏡の死の顔ハイドに暗号的に、隠れた仕方仕方で気付いて「不気味さ」「不吉さ」を感じているのです。エンフィールドもアタスンも隠れたる「私は殺す」、隠れたる殺人鬼ハイドなる私として立っているものであり、且つ、同時に私を「私は殺し」て人倫的死に墮した「私は殺す」、殺人鬼ハイドなる私として立っているものであり、この隠れたる「私は殺す」、隠れたる殺人鬼ハイドとしての私エンフィールド、アタスンがおのれの隠れた素顔である死の顔ハイドに暗号的に気付いて不安を覚えているのです。その死の顔ハイドは、私が日常対象的に眺めている客体世界（虚妄の自我の投影として「受動的虚無」の深淵の水鏡と

化した)につねに表れている死の素顔ハイドでありながら、自己満足の無知の私ゆえに私の眼には見えながら、見えないままに、隠れている、私自身の死の素顔なのですが、エンフィールドとアタスンは不気味なハイドの棲家を見ることにおいて、実は自分の眼に見えながら見えないでいたおのれ自身である死の顔ハイドに、依然暗号的、無自覚的ながらも、とにかく気付いたのです。「盲目の額みたい、窓の無い色褪せた壁」、盲壁(a blind wall)はそのまま、外にして内なる盲目の死の顔ハイドになっているのであり、それが盲目であるのは、それが、死の水鏡に映る自分を見る眼を見る眼でありながら、それが自分の実体を映す映像であることに盲目であるゆえに、それは死の水鏡に映る盲目の自分を見る盲目の眼を見る盲目の眼であるからであり、「どの造作にも長い間手入れを怠っていたことを物語る汚れたしをとどめている」建物はそのまま、かく盲目であり気付いていないゆえに、顔の「どの造作にも」(in every feature)長い間顧みられていないことを物語る汚れたしをとどめている外にして内なるハイドの死の素顔になっているのです。それは人間始めて以来、一度も人間によって明るみに曝され手入れをされたことのない「原罪」の顔であり、禁断の「善悪を知るの木」の実を喰らったアダムとイヴの末裔として生来かしく分別ある人間が生来無知とするところの罪悪深重の凡愚なる人間の隠れた素顔なのです。それは、その自己隠蔽の強化をもって文明の旗印とし進歩としている社会にあつては、いよいよ顧みられることなく薄汚れ放置された隠れた人間の素顔であり、何よりも、それは、私始つて以来、一度も私によって明るみに曝され手入れされたことのない隠れた私の「宿業」の素顔なのです。しかし、ジークル博士の顧問弁護士としてハイド氏の事件に直接捲き込まれてゆき、それを通じて隠れたるジークル・ハイド氏としてこの人間存在を自己自身において問うことを迫られてゆくアタスン氏にとって、とりわけ、それは「不気味」で「不吉な」、スフィンクスの謎の如く運命的な、おおいなる死神ハイドとの暗号的遭遇であると言わなければなりません。

ところでエンフィールド氏が事件を目撃する前の街並みの情景描写、「どの街もどの街も、なにか行列でも待っているように、煌々と明りがついていて、そのくせ教会のようにがらんとしていて……」もまた予感に満ちています。独り歩いてゆくエンフィールド氏のその心細さ、理由なき不安は自分が依りかかっていたところの見慣れた日常的生活風景が消え去ることにより、つまり、自分が自己満足的に依りかかっていたところの、そこにそれとして表れていた確かなはずの自我がその虚妄性を曝露して消え去ることにより、いまやそこに「受動的虚無」の深淵を無自覚ながら見て不安におののいている虚妄の自我自身の事実を物語っています。それは虚妄の自我（ジーキル）が虚妄の自我自身の姿（人倫的の顔の殺人鬼ハイド）に对象的且つ無自覚的に気付き、かくしておのれの虚妄性（人倫的の死の「私は殺す」としての私）を曝露されかけておののいている姿です。どの街もどの街も昼間の賑かさが虚飾であり、闇夜の空虚さが実体であるかのように、昼間の自己満足的エンフィールド氏の街も昼間の賑かさが虚飾であり、闇夜の空虚さが実体であるかのように、自己満足的であるゆえに昼間であり白昼夢である）が虚飾であり、闇夜の心細いエンフィールド氏の方が実体であることを曝露するかのよう、延々と空しく脅威的に続き、独り家路を急ぐエンフィールド氏があたかも呪われて「地に吟行ふ流離子」カインであるかのように、延々と続く街並みがそのままエンフィールド氏でありエンフィールド氏がそのまま延々と続く「受動的虚無」の街並みになっているのです。そのようにみるならば、「世界の果ての或る処から家に帰ってくる途中」のエンフィールド氏とはただの風変りな修辭文句ではなくて「地に吟行ふ流離子」カインとしてのエンフィールド氏を語っています。丁度カインが弟アベル殺しの記憶に呪われ、その記憶から遁れるべく世界の果てまで流浪しても、その流浪自体が呪いの記憶に駆り立てられ且つその具現するところとなって、絶えずその呪いの記憶の本源へ引き戻されるように、日常の行動がすべて虚妄の自我自身である無限の「円形の砂漠」、無限の「円形の孤独」の海の空しい放浪者の無行動的行動になっているエンフィ

ールド氏もまた、無自覚ながら、「世界の果ての或る遠い処から家に帰ってくる途中」だったのです。というのは、カインにとって彼の家郷はアベル殺しの血塗られた家郷となり、従って、家郷に帰ることがその罪業の覚知を離れてはあり得ず、その罪業の覚知を措いて他にないように、エンフィールドの家郷もまた「私は殺す」としての私なる血塗られた記憶の家郷であり、彼がいまハイド氏と遭遇せんとしていること、ハイド氏との遭遇を通じて彼自身の隠れたハイド氏と暗号的ながら遭遇せんとしていることを考えるならば、「世界の果ての或る処から家に帰ってくる途中」は、同時にそのまま、内的放浪の意味において、「世界の果ての或る処から家に帰ってくる途中」になっているのです。この場合、「世界の果て」とは無限放浪を意味し、また、最も近くて最も遠い処、つまり、自己満足的無知の距離を意味しますが、この最も遠くて最も近き「罪惡深重の凡夫」、ハイドこそ帰るべき家郷であり、おおいなる生命の死神ハイドなる父母が絶えず呼びかけながら空しく帰りを待ち侘びる家郷なのです。実際、家に帰るとは元の宿業の家に帰ることであり、その元こそ本であり、存在の本源であり、非在の存在としての流浪の果てる処なのです。しかしながら、エンフィールド氏のその後のハイド氏に関する態度からして、彼はかかる宿業の自覚とは無縁であるかのごとく、結果的には単純に「世界の果てから家に帰ってくる途中」にすぎないのです。ところで、「なにか行列でも待っているように煌々と明りがついて」いる街並みが待つその「行列」とはどうやら「受動的虚無」の深淵の主である死神ハイドの行列となるらしく、「教会のようにがらんとしている」街並みも、単純に、人気のない教会のように人気のない街並みというだけではなく、それがそのまま、「うつろなる人」としてのエンフィールドの外にして内なる状況を表しています。おそらく、エンフィールド氏は人並みの信仰の持主であり、善良そのものの紳士ではありましたが、しかし、彼もまた人間存在の無動機ゆえに絶対的な過去性である自己中心的他者否定的虚妄の自我として立っているのであり、しかも人

間存在としてかかる自己についての自己満足的無知を日常性としていっているのです。いかに善良で無邪気な人間であれ、この自己中心性が知らずしてすでに最初から無動機的に犯されてある罪性であるゆえに、その意味において無罪(innocence)であり、その善良さ、無邪気さ(innocence)は善良さ、無邪気さであることに変わりありませんが、しかしまた、それゆえにこそその善良さ、無邪気さ(innocence)は自己満足的無知にもとづいて無罪(innocence)を気取る偽善的無知(innocence)おめでたさ(innocence)であると言わなければならず、やはり、「白く塗りたる墓」たることを免れることはできません。信仰の道がこの「白く塗りたる墓」としての虚妄の自己を問うところにあるとすれば、それを棚上げしている信仰の持主エンフィールド氏の日常的自我もまた「がらんどうの教会」であり、神と生きていたものが非在の神であり、そこに投影された虚妄の自我の絶対化としての神に他なりません。いやしくも神在りとすれば、神はこの「がらんどうの教会」(「受動的虚無」の深淵、その主たるハイド)たる自己を問い覚知する方向にのみ在るのであって、その意味で、神はこの「がらんどうの教会」の隠れたる眞実の主(「受動的虚無」の深淵の隠れたる眞実の主、おおいなる死神ハイド)なのです。事実、自我が「がらんどうの教会」であるがゆえにこそ、神はこの「がらんどうの教会」として具現しなければならず、この「がらんどうの教会」そのものが神なる言葉として絶えず呼びかけ、その自我の事実へと呼び返そうとしているのです。エンフィールド氏がこの「がらんどうの教会」なる虚妄の自我をもって「篤信の教会」として疑わぬとしても、「教会のようにがらんとした」いる深夜の街並みを独り歩くことによって、「がらんどうの教会」としての自己の隠れたる実体を不安という隠れたかたちで露呈せざるをえず、また、不安という隠れたかたちでみずからも意識せざるをえません。不安はまた自己の隠れたハイドの実体に対する自己隠蔽、自己忘却の衝動として表れざるをえません。従って、彼が不安に駆られて「じいっと耳をすまして、警官の姿をしきりに求めはじめる」とき、彼を支配する

ものは自己隠蔽的意識であり、自己隠蔽的たらざるをえぬ善悪の道德（法律）意識であって、だからこそ「警官の姿をしきりに求めはじめ」のです。それはどうにも抜きがたい、且つ、許容されなければ窒息してしまうごとき人間の弱さの世間性であり、また、それ自体のなかに本来的な秩序感覚をいささか含んでいる世間性ではありましようが、しかしまた、それこそ「信」においてつねに問われるべき世間性であり、つねに問われることにおいてのみ少しはまともに働くようになる世間性なのです。

かかるエンフィールド氏と同じ内的状況が広く蔓延しているという観点からすれば、エンフィールド氏の内にして外なるその「なにか行列でも待っているような」或は「教会のようにがらんとしている」街並みは近代のキリスト教社会を象徴しているものとれますが、「がらんどうの教会」とは人氣がないというだけではなく、神が不在の教会ということでもあるやもしれず、人氣がない時だけではなく、人氣に満ち、あたかも神の存在に充ち満ちているかにみえる時でさえ、その神は「うつろなる人びと」の自我の自己満足的投影としての神であるゆえに、神が不在の、「うつろなる人びと」の「うつろなる」教会であるかもしれません。神の相対的対象化、或は相対的に対象化された神は、人間の分別の自己中心の対象化作用、概念化作用ゆえに、キリスト教社会においてはいつの時代でもどの個人においても虚妄の自我の投影としての神という、つまり、信仰の信憑性の問題としてつねに問われていることですが、自己満足性の批判原理としての信仰の本質を見失い、自己を問うことを知らず、逆に信仰そのものが自己満足の巢窟と化し、絶対化された虚妄の自我の投影をもって神とする「白く塗りたる墓」と化しつつあるごとき近代社会においては、「原罪」の教義の決定的意義との関連において、それはとりわけ問われるべき問題です。

さて、例のハイドの事件の突発において、エンフィールド氏の不吉な予感はある意味において、しかし思

いがけないかたちで的中します。いたいけな女の子を踏みにじって去ってゆく男の姿は、それを目撃した彼にと
ってまさしく「地獄絵」であり、「とても人間の行為ではなく、まるでクリシュナ神像を見る思いでした」が、
クリシュナ神(Ugghernaut)とは、辞典に依れば、インド神話でヴィシュヌ(Vishnu)の第八化身で、その神像をイ
ンドのプリ市では毎年例祭に巨大な山車に乗せて市中を引き廻すならわしで、これに撥き殺されると極楽往生で
きるといふ迷信から、すすんでその車輪の下敷きになる者が多かったということです。「なにか行列を待ってい
るみたい」な街並みのその行列とは、どうやらこのハイドなるクリシュナ神像の行列であり、しかもその山車の
下敷きにされるのはエンフィールド自身ではなくて、夜明け前の三時に家族のどれかの急病で医者呼びに使い
に出された年輪もいかぬ女の子なのです。それは極楽往生どころか、地獄絵そのものですが、この悪の化身のご
ときハイドは、このハイドを捕えたエンフィールド氏にとってどうも他人事ではないようなのです。エンフィー
ルド氏ばかりではなく、駈けつけた少女の家族の人たちや医者にとっても、それは単純に**対象的存在**として憎悪
して済むような他人事ではなくて、自分事であるようなのです。エンフィールド氏は「一目見ただけでくだんの
男に憎悪を感じ」ましたが、ふだんは「^{バグダッド}風笛みたいに鈍重な感じの」お医者さんまでが、エンフィールドと同じ
ように、「彼に対する殺意で胸をむかつかせ顔面蒼白になってゆく」のです。しかもそれは男たちばかりではあ
りません。女たちまでが「怪鳥ハーピーみたいに猛り狂い」、犯人にいまにも襲いかかろうとするのをエンフィー
ルドが押し止めるのに懸命にならなければならなかったほどなのです。このように、みんなが怒りに狂うのも
至極当然のことですが、しかし、それにも拘らず、ハイドによって惹き起された彼らの「殺意」は、彼らもまた、
根源的には、ハイドと変りがないことを物語っています。善悪分別の道德意識は、道德意識に執られる道德意識
となり、つまり、復讐の道德意識となり、はしくも、道德意識のかけに自己隠蔽、自己忘却されている自我の

隠れたる実体の表面化するところとなり、道德意識そのものの底の浅さ、なお底深く横たわる「受動的虚無」の深淵を物語っています。かくして、彼らの「殺意」は善良な彼らの内にもハイド的悪の要素が潜在しているといふことを意味するのではなく、人間存在として、生来「私は殺す」なる私として立ちながらその素性が隠れている（ハイド）偽善の自我（「私は殺す」としての私に気付かぬ私ジークル）が、ハイド氏の出現によってそのハイド氏に対する「殺意」というかたちで、その隠れたる素性（ハイド）を、つまり、本然的偽善性（「私は殺す」としての私）を露呈せしめられるということを意味するものです。ひとの生命を救うのが天職の医者が「殺意」の仲間に加わったということ、しかもその医者が「どこにでもある平凡なお医者」であるということは、どんなひとでも、また、だれでもがかかる問わるべき虚妄の自我として立っているということです。そうすると、「ひとの生命を救っている」という意識自体が自己満足の無知の「所有のたかみ」として問われることにもなります。

かくして、殺意に満される医者も、怪鳥ハービーのごとく憎悪に燃える女性たちも、ハイド氏を見ることにおいて、無自覚ながら、そのままそこに自分自身の外にして内なるハイドを見ているのであり、それによって偽善的ジークルとしての私というこれまで隠れていたおのれの素性の覚知を迫られているわけです。また、自分をじろりと見るハイド氏の醜惡な眼差しに気付いて冷汗かいたエンフィールド氏は、その衝撃において同時に、ハイド氏としてそこに表れた彼自身の隠れたるハイドの醜惡な眼差しに気付いて、このおのれの隠れたる醜惡な素性（ハイド）、つまり、偽善のジークルとしての隠れたる素性に暗号的に気付き、その意味で暗号的に曝露されかけて冷汗かいたのです。その意味では、自分（偽善のジークル）がつかまえた外にして内なるハイドによって逆につかまえられているわけです。ハイド氏が地獄のサタンであり、断罪さるべき人倫的死の存在であるとすれば、ハイド氏はまた、ハイド氏を見る者自身の人倫的死なる隠れたハイドの実体をあらわに体现して見せているとい

う点で、主体的にはまことに積極的側面を有するのです。もしエンフィールドがかくハイド氏を通して、おのれ自身である外にして内なる死の顔ハイドを覚知し（ということは「私は殺す^{ジキヤル}」としての私のこの偽善性を覚知すること）、このハイドなるおのれの素性の覚知のなかにおのれが空無化されるというかたちで、死神ハイドなるクリシュナ神像の山車に身を投げ出して擦き殺されたならば、まさしく極楽往生したことでありましょう。しかしながら「此度の一件をスキャンダルにしてロンドン中にお前の悪名を知れ渡らせてやることができるし、またしてみせる」とハイド氏を責め立てるエンフィールド氏と医者、他人の「躓きの石^{スキャンダル}」（スキャンダルのギリシヤ語の語源は「躓きの石」）をスキャンダルにしようとするのみで、「躓きの石^{スキャンダル}」としてのハイド氏が、ハイド氏への彼らの反応ぶりにおいてあばき立てている彼ら自身の「躓きの石^{スキャンダル}」を、さらには様々な「躓きの石^{スキャンダル}」の由つて来たる本然的「躓きの石^{スキャンダル}」としての虚妄の自我自身を棚上げするという新たな「躓きの石^{スキャンダル}」をつくり出すのです。「怪鳥ハーピーみたいに猛り狂う」女たちも同罪です。ハーピーとは、辞典に依ると、ギリシヤ神話に登場する、顔と体が女で鳥の翼と爪をもった強欲な怪物ということで、同じギリシヤ神話に出てくる、胸から上部は女でライオンの胸に翼を備えた例のスフィンクスに似ていますが、彼女らは、彼女らが憎悪を燃やす（そうなるのも無理はありませんが、それにも拘らず）ハイド氏に劣らず醜悪で、彼女らがハイド氏なのか、ハイド氏が彼女らなのか見分けがつかないほどです。というのは、そういう自己を主体的に問うとき、事実、同じであるからです。彼女らが憎悪の眼でハイド氏を見るとき、ハイド氏において見ているのはハイド氏であると同時に、そのまま怪鳥ハーピーとしての彼女ら自身であり、主体的にはハイド氏は怪鳥ハーピーとして彼女らに、これが彼女ら自身の姿であることの覚知を暗号的に迫っているのであり、怪鳥ハーピーとしてのハイド氏はまさしくあのスフィンクスの謎となつて、ギリシヤ悲劇のオイデプス王におけるごとく、彼女らに謎解きを（但し、この場合は

空しく)迫っているのです。

ところで、ハイド氏の方は、こうして憎悪の顔の輪に取り囲まれ形勢不利になると、なるほど相変らず「凶悪な、せせら笑うような冷然とした表情」をしてはいませんが、「紛れもなく怯えてもいて」、先ほどの狂暴な強さが弱さに変じるのであり、なるほど「実際サタンのように」ふてぶてしく自分を押し通しはしますが、それはむしろ弱さを隠蔽する強がりの仮面でしかなく、その仮面自体が却て弱さを物語っています。というのは、サタンは受動的虚無であり弱さであって、その強さと弱さとは相互還元されるものであり、その強さは弱さの強さ、つまり、弱さの強化にすぎず、それは最初から弱さであったのであり、弱さを蔽う仮面的強さであったのです。

「怪鳥ハーピーみたいに猛り狂う」女たちの憎悪の顔の輪に取り囲まれてハイド氏が「紛れもなく怯えてもいて」とは、丁度「教会みたいにならんとしている」夜明け前の暗い街路を怯えて歩いている時のエンフィールド氏と同じく、それまでの対象世界との(意識の概念化作用による)支配被支配の関係をいまや逆転せしめられたことを物語っています。また、ハイド氏は女たちのハーピーのごとき憎悪の顔に脅威を感じることに、実は同時に、その憎悪の顔にそれとして暗号的に表れているハイド氏の内なる死の顔ハイドの憎悪の眼差しに脅威を感じているということであり、従って、脅威を感じるハイド氏は、内なるハイド氏によって脅かされるハイド氏であることによって、内なるハイド氏によって脅かされる偽善のジークル博士として立っているわけで、その姿が依然醜悪なハイド氏であっても、ハイド氏は偽善のジークルとしての醜悪なる正体を露わにしたジークル博士なのです。事実、変身用の例の薬品の服用如何に拘らず、ジークル博士は隠れたる「私は殺す」なる私ジークルとして隠れたる殺人鬼ハイドなのであり、また、殺人鬼ハイドは隠れたる「私は殺す」なる私ハイドとして隠れたるジークルなのです。

さて、エンフィールド氏の話の続きですが、例の犯人は

「鍵をさっと取り出して内に入ってゆき、やがて金貨で約十ポンドと、クーツ銀行宛の預金残額の小切手とをもって戻って来ました。その小切手は持参人払いで振り出され、或る名前が署名されていました。その名前は、私の話の要めのひとつになってはいるのですが、言うわけにはいきません。しかし、それは少くとも非常によく知られ、また新聞雑誌にも載る名前でした。小切手の金額は高額でしたが、その署名は、それが本ものでさえあれば、それ以上の金額でも信用できるものでした。私は、なにもかもがわしく見えること、実生活で、朝の四時に地下室の戸口から入って行って、百ポンドに近い金額の他人の小切手をもってそこから出てくるなどということはありえないということを件の紳士に失礼ながら指摘してやりました……。」

「件の紳士」即ちハイド氏が出した小切手の署名とは、言うまでもなく、「ジークル博士」ですが、エンフィールド氏は「その名前は私の話の要めのひとつではあるけれども、言うわけにはいきません」と申して、その名前を伏せていますが、その理由は、「ジークル博士」が余りにも高名であり、それにまた、眼の前の醜惡な犯罪者とは月とすっぽんほど違う上品な紳士であるがために、両者が同一人物であるなどとは夢にも考えられず、名前を言えば、いわれ無くその方の名譽を毀損することになるのを恐れたということでありましょう。しかし、いかに高名な、また典型的な紳士であろうとも、人間存在として最初から無動機的に人倫的死的ハイドとして立っているものであり、それを隠れた実体とする「私は殺す^{ジークル}」としての私ジークルとして立っているのであって、現実のハイド氏、つまり、ジークル博士の行動はそれの具現なのです。ひとはだれしもかかるおのれの隠れた素性を問われているのであり、また、だれよりも自己自身が問われているのです。エンフィールド氏の「まさかジークル博士が」という思いのなかには「絶対に私は」ということが当然のこととして含意されているのであって、

事件を通して問われているジークル・ハイドとしての自己自身を問題の外に置いているのです。従って、エンフィールド氏の思惑とは違った次元において、彼自身は無知ながら、主体的な意味において彼にとって「その名前は私の話の要めのひとつ」になっているのであり、また、彼の言う意味とは違った次元において、彼はその名前を言うわけにはいかないのです。というのは、エンフィールド氏がジークル博士の名前を言えば（尤も、問題を単純に他人事として対象的に捉えている彼にあっては、この場合、名前を言わなくても同じ事なのですが）、問題を単純にジークル博士という個別的人物に帰することになるからです。エンフィールド氏が真実にジークル博士の名前を言うことができるのは、このジークル博士・ハイド氏の事件を主体的に受けとめて、エンフィールド自身としてのジークルを語ることができるときでなければなりません。そのようにみると、「なにもかまがいがわしく見える」とエンフィールドが例の小切手についてハイド氏に文句を言ったとき、この文句は彼の意味とは違った次元において生きてきます。というのは、ここで用いられている「いががわしい」の英語 apocryphal はギリシャ語で「隠れた」「隠されている」という意味であり、ジークル博士の署名入りの小切手の、エンフィールドにおける右の主体的意味は（ハイド氏即ちジークル博士という事実とともに）エンフィールドからは未だ「隠されており」「隠れており」、エンフィールドは未だそれに気付いておらず、その小切手の主体的問いかけに気付いておらず、ジークル・ハイドとしての自己の隠れた実体について自己満足的無知にあるために、彼にとっては「なにもかまがいがわしく見える」のです。そしてこの小切手の中に「隠れている」主体的意味こそ人倫的死のハイドという、つまり、「私は殺す^{ジークル}」としての私という彼の自我の隠れた素性なのです。道元禪師は「仏道を習ふといふは自己を習ふなり」と申されましたが、この自己の素性を問うことこそ宗教の本質でなければなりません。この事件がエンフィールドのかかる自己を問うているという意味で、それは彼においてまさしく「隠れ

た」(apocryphal)「聖書外典」(Apocrypha)であり、彼は事件の展開を通じて、この事件を主体的に受けとめることによって「聖書外典」としての隠れたる、本来的意味を顕在化しなければなりません。尤も、もし彼がかかる自己を問うことを棚上げし依然自己満足の無知にとどまるならば、彼の信仰そのものがかかる虚妄の自我の絶対化として偽善の「白く塗りたる墓」となり、かかる信仰の眼からすれば、この「聖書外典」は「典拠の怪しい」「いかがわしい」(apocryphal)ものとして無視され、「隠れたる」(apocryphal)ままであることでありましよう。それはエンフィールドだけの問題ではありません。『ジークル博士とハイド氏の奇妙な事件』は「隠れたる」「聖書外典」として、あのスフィンクスの謎として、読者自身にみずから問いかけ、「人間」という答えを迫っているのです。実際『ジークル博士とハイド氏の奇妙な事件』The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hydeは、自身が最も経験し慣れた「事件」「境遇」「真相」(the case)であり、これを自分とは無縁の奇妙な事件(the strange case)として片付けてはなりません。実際、この宿業なる人間の隠れた事実はそのまゝ隠れたる人間であり、宿業の自覚とは、自己隠蔽としての虚妄の自我が破れて曝された宿業のわが身が大悲の光に包まれて人間に成る、最初から在る人間に成る事であり、宿業のわが身自体が不可思議な真実となっているのです。

さて、翌日例の小切手を銀行にもって行って、それが本ものであると知らされたエンフィールド氏は自分の耳を疑いますが、それでも彼はハイド氏がジークル博士だとは勿論思わず、きっとジークル博士が羽目を外した若い頃の弱みをこの男に握られて強請られ、そういう事情からこの男がジークル博士の振り出した小切手をもっているのだらうと想像し、今、散歩相手のアタスン弁護士に語るのです。

「そうです、いやな話です。というのは件の男はだれも関り合いをもてないような、本当に憎むべき奴で、それに引きかえ、小切手の振出人はそれこそ礼法の鑑みたいなので、それに名士でもあり、(さらに具合わるいことに)いわゆる

善行を行う人たちのひとりなんです。強請ですよ、きっと。正直者がなにか若い頃のご乱行の法外な代価を今になって払わされているというわけですよ。そういうわけで私はあの戸口のある家を強請の家と呼んでいるんです。尤もそれでもなにもかも説明がつくわけでは決してありませんがね」。

この「だれも関り合いをもてないような、本当に憎むべき奴」と、「礼法の鑑」でありいわゆる善行者である「名士」との極端な落差のために、エンフィールド氏は両者を結び付けて同一人物として考えることがどうしてもできないのです。ところで、この「憎むべき」「地獄に堕ちるべき」(damnable) ハイドは、実は、すでに地獄に堕ちて人倫的死としてある、「受動的虚無」そのものとしてあるものであり、しかも、このハイドは他ならぬ「礼法の鑑」たるジークル博士そのひとなのです。「礼法の鑑」の「礼法」を意味する英語 the proprieties は古くは「財産」(property)をも意味したのですが、社会的名望高いジークル博士にあつては、どうやら彼の「礼法」は「所有のたかみ」を形成する「財産」になっており、その「財産」(ジークル) 自体が「受動的虚無」(ハイド)であり、「受動的虚無」の自己隠蔽(隠れた、ハイド)なのであり、彼のいわゆる善行もまた自己隠蔽的偽善(偽善的ジークル)たらざるをえないのです。それは「礼法の鑑」が虚偽であるということではなく、いかなる「礼法の鑑」といえども、人間存在の無動機的、絶対的過去性としてある、しかも自己満足的無知としてある虚妄の間の落差の烈しさは、虚妄の自我におけるこの無知の烈しさを意味しますが、同時に、この無知が覚知されたときの悲劇的な没落の烈しさ、つまり、**真実**に曝されることの烈しさともなりうるものです。

ところで、すでに地獄に堕ちている、「受動的虚無」としてあるハイド氏は、たしかに「地獄に堕ちるべき」非在の存在ですが、しかしながら、エンフィールド氏がハイド氏のことを「地獄に堕ちるべき男」と言うとき、

あたかもエンフィールド氏自身は「地獄に墮ちるべき男」ではないかのごとく、すでに地獄に墮ちている男ではないかのごとく、或は、現に天界にあって下界を見下しているかのごとく聞えますが、他ならぬその天界こそ自己満足の無知の「受動的虚無」地獄に他ならないのです。しかしエンフィールド氏の心に「憎むべき」「地獄に墮ちるべき」男として焼きつけられたハイド氏は、逆にエンフィールド氏の自己満足を脅かす存在となり、皮肉にも、彼の思惑をあらゆる意味ではるかに超えた次元で、まさしく彼を「強請り」、自己満足の「所有のたかみ」としての彼の非在の存在をすべて強請り取らずにはおかぬエンフィールド自身の外にして内なるハイド（復讐の死神ハイド）になっているのです。その意味において、ハイド氏の家はまさに「強請の家」なのですが、この「不気味な」、「不吉な」「強請の家」はエンフィールド氏にとって単純に外なる「強請の家」でしかなく、それの主体的意味は強制的、暗号的に感知されるのみで、従って、彼の不安はどこまでも他人事としての不安なのです。かくハイド氏を虚妄の自我の外にして内なるハイドとしてみると、エンフィールドの思惑とはこれまた違った次元で、たしかにジーキル博士はハイド氏に強請られているのです。ハイド氏はジーキル博士の実体であるゆえに、ハイド氏の出現（博士の実体の出現）はジーキル博士の偽善の実体を曝露しようと脅迫しているのです。同時にそれを通じて、「私は殺す」としての私ジーキルというジーキル博士の本然的虚妄の自我の偽善の実体を曝露しようと脅迫しているのです。しかしながら、このハイド氏自身もまた「強請」の被害者なのです。なぜなら、ハイド氏にかかる意味でジーキル博士を強請りながら、他面、自分が対象的存在として強請っているジーキルが実はハイド自身の実体であることに気付いていない（だから強請っている）ゆえに自分では分りませんが、実はハイドは自分の実体であるジーキルを眼の前に見ることによって、自分がジーキルであることの覚知を迫られている、その意味で、ジーキルがハイドを脅迫しているのです。言いかえれば、ジーキル・ハイドなる虚

妄の自我が自我のかかる自己破壊性として隠れて表れているおおいなる復讐の死神ハイドによって、暗号的ながら、絶えず脅迫され、その自己満足的無知の「所有のたかみ」を強請られて、そういう一切の意味においてハイド氏の家は「強請の家」なのです。

ところで、アタスン氏が「それで小切手の振出人（ジークル博士）があそこに住んでいるかどうか君は知らないだね」と尋ねると、エンフィールド氏は、「住んないような感じでしよう？　しかし、あいにく以前にたま彼らの住所を私は心にとめていましたね。彼はどこかの辻に住んでいるんですよ」と答えます。「で、君は一度も尋ねてみたことはないんだね——あの戸口のある家のことを？」とアタスン氏がたづねると、エンフィールド氏は次のように答えるのです。

「いいえ、気おくれがあったものですから。私はあれこれ詮索するのがとても嫌いでしてね。それは余りにも最後の審判じみたことです。なにかひとつ詮索を始めるとします。すると、それはひとつの石を転げ落すようなものでしてね。あなたがどこか丘のてっぺんに静かに腰を下しているとします。すると、その石が転げ落ち、そのはずみで他の石までがいくつも転げ出し、やがて、どこかの人の好いおやじ（こっちがまさかと思うようなひと）が自分の裏庭で頭を石に打たれて死に、家族が名前を変えなければならぬことになります。いや、それより君子は危きに近寄らずというのが私の主義なんです。」「大変結構な主義でもあるね」と弁護士は言った。

エンフィールドの言葉はまことに象徴的に曖昧です。「あれこれ詮索するのが嫌いでしてね」とは、ひとつには他人の「^{スキャンダル}蹟きの石」に首を突込むのは嫌いだということ、それは大変結構なことであり、また、紳士の鑑である高名のジークル博士が昔犯した若気の過ちを悪い奴に握られて強請られているのだとすれば、過ぎ去って無に帰したはずの過去の過ちが、自分の詮索がきっかけになって、「最後の審判」の目みたいについては世間の明

るみに出て博士の名誉を永劫に失墜させることになるかもしれないことを危惧しているようで、ジーキル博士への思いやりも働いているようです。しかしながら、他人の「躓きの石」を棚上げすることによって、エンフィールドが自分自身の「躓きの石」を問うことをも棚上げする結果になっているところに問題があります。言いかえれば、他人の「躓きの石」を単純に他人事として対象的、個別的に捉えるのではなく、その他人の「躓きの石」の象徴するところを捉える、つまり、それを他人的個別性を超えて人間存在に普遍的な問題として捉えることにより、それが同時に本然的「躓きの石」^{ベヤンダ}としての虚妄の自我を問うものとして自分自身にはね返り、それによって抜き差しならぬ主体的個別性を帯びてくるべきなのです。それは他人的個別性を曖昧にするものではなく、逆にそれを主体的に明確にすることになるのです。エンフィールド氏はそういう仕方では他人の「躓きの石」に「首を突込む」べきだったのです。たとえもしエンフィールド氏がハイド氏の素性をはじめ他人事として追及し、ハイド氏が、思いもかけず、実はジーキル博士（「どこかの人の好みおやじ」、「こっちがまさかと思うようなひと」）であったことを発見したとしても、その発見の衝撃が自分自身にはね返ってきて自己満足的無知の自我の頭を打ち砕き、人倫的死のハイドなる隠れたる自己の素性への目覚め、つまり、「私は殺す」としての私という隠れたる自己の偽善的素性の発見というかたちで自我を死に至らしめ、かく人倫的死の覚知というかたちで人倫的死の身のままに人倫的生へと転ぜしめることになったかもしれない。その場合、躓きの石は、思いもかけず、まさしく「躓きの石」となり、「丘のてっぺん」でうっかり石を転げ落した「あなた」がエンフィールド氏であるとするれば、はるか下方の「自分自身の裏庭で石に頭を打たれて」死ぬのもエンフィールド氏自身ということになり、他人の「躓きの石」の追及、他人の隠れたる素性の追及が、そのまま無自覚ながら、自分の「躓きの石」の追及、自分の隠れたる素性の追及になっているわけで、他人の素性の発見（こっちがまさかと思うよう

なひと」が、そのまま、他ならぬ自分自身の素性の発見(「こっちがまさかと思うようなひと」)に直結するのです。他人の蹟きの石(ハイド氏)に蹟いて、転げ出したその蹟きの石(ハイド氏)に頭を打たれてくたばって、蹟きの石(ハイド)としての自分を曝露し、かくして他人の蹟きの石(ハイド氏)に蹟いた自分が蹟きの石(ハイド)であったことを自己曝露するとは、まことにもって有難い皮肉です。この虚妄の自我の覚知こそ、「汝自身を知れ」というあのデルフォイの箴言の実現であり、非隠蔽性^{フレイタイル}としての真理の顕現であり、「最後の審判」に他なりません。というのは、W・ブレイクも言うように、「なんびとにせよ偽りを拒否し真理を奉ずるときつねに最後の審判はその個人のうえに下る」からであり、「それは余りにも最後の審判じみたことです」というエンフィールド氏の言葉は彼自身には思いもかけない次元において彼自身にあてはまることなのです。尤も自己自身を「あれこれ詮索するのがとても嫌い」で、「君子は危きに近寄らず」を主義としているエンフィールド氏にとっては、「それは余りにも最後の審判じみたこと」であり、「気おくれ」を感じることではあります。いずれにしても、この「不気味な家」のある街並みの散歩を契機として、エンフィールドの散歩相手のアタスン弁護士の意識に「ジークル博士とハイド氏」の事件が次第にその影を濃く落してゆくこととなります。先に私が「君子は危きに近寄らず」と仮に意識した部分のエンフィールドの言葉は、‘...the more it looks like Queer Street, the less I ask’ in Queer Street’ とくれば、俗語の慣用的表現で、「借金に困って」、「窮境に陥って」、「不評判で」といった意味がありますが、その散歩の街並みは少くとも君子たるアタスン弁護士を次第に「危きに近寄らせ、窮境に陥らせてゆく不評判な、文字通り「奇異なる街並み」Queer Streetです。おまけに、先の強請は強請でなく、どうやら絶対的過去の事ゆえ自分では覚えなくして(存在の不安というかたちで)憶えている借金の返済の強催促らしく、まさに借金に困っている自我です。「君子は危きに近寄らず」をもって「大変結構な主義

でもある」とと相槌を打つアタスンも、一方では、エンフィールド同様、慎重居士ではありますが、しかしまた、そのあとで「君のそれは結構な主義だね」と、わざわざ「君の」をつけ加えて繰り返し、さらに「しかし、それにも拘らず、ひとつ尋ねたいことがある。私は子供を踏みつけて去ったその男の名前を聞きたいんだ」と言つて、エンフィールドとは違って、犯罪者を顧客とする弁護士にふさわしく「没落する」者、地獄へ墮ちる者への関心をみせています。尤もそれは依然他人事としての関心にとどまてはいませんが、しかしまた、彼は忌むべきもののもつ魅力に惹かれ、一方では忌避しながら、他方では忌避するものに知らずして取り憑かれ、引き込まれてゆく、いわば無自覚的な無知の愛知者です。自己満足的無知のたかみを好むエンフィールドと、同じく自己満足的ながら虚無の深淵への傾斜をみせるアタスンとのこのささやかな性向の相違は興味深いものです。この二つの相反する性向は無知の愛知者たるいかなる人間存在においても共存するものです。先に私は、二人が別々の人物でありながら、同時にまた、相互に自我の投影になっていると申しましたが、右の意味においても、アタスンがエンフィールドを見ると、前者は後者においておのれのエンフィールド的側面を見ているのであり、後者が前者を見ると、彼はアタスンにおいておのれのアタスンの側面を見ているのです。従つて、アタスンが「君子は危きに近寄らず」を主義とするエンフィールドに不満をもつとき、同時にエンフィールド的自己への自己不満としても立っているわけで、あえてハイド氏に関心を示すことによつて、アタスンは自己満足的無知のたかみにとどまることを好むおのれのエンフィールド的側面を否定し、依然無知ながらも、無知の愛知者として隠れたる「深淵」の現実への下降的傾斜に次第に自己集中してゆくこととなります。エンフィールドが途中で登場しなくなるのは、「君子は危きに近寄らず」をおのれの主義とする彼が「ジークル博士とハイド氏」とは無縁の存在となるからというだけではなく、アタスン自身の主体的問題として、右のごとき内的必然性に基いてのことなのです。（つづく）